音　イメージ　　　からだ

…ことば以上に伝えるよ…！

③からだとことば

ねらい：からだとことばのつながりが不可分であることに気づく。

　　　　ことばの意味のみならず、音もまた、イメージに作用することに気づく。

対象：　小学校高学年以上

所要時間：45分

用意するもの：小学生〜中学生の場合、特になし。

　　　　　　　高校生以上の場合、配布資料を配布してもよいし、しなくてもよい。

進め方：下記配布資料を参照しつつ、以下のように進める。

　　　　 ①「原初音韻論遊び」を紹介する。

②「原初音韻論遊び」で、いくつかのことばをあてはめてみる。

③「原初音韻論遊び」で、自分の名前をあてはめてみる。

＜配布資料＞

①原初音韻論遊びとは？

　原初音韻論遊びとは、体操教師、野口三千三が考案したことば遊びです。

ことば遊びが体操だなんて、おかしいですか？

野口は体操教師としてからだのあり方を探る上で、ことばとイメージをその最も大事な手がかりとしました。彼の体操は「野口体操」と呼ばれ、これまでの筋力の量的な増加を目指した身体作りを目指す体操とは異なり、人間をひとつの大きな皮袋の中に水が詰まっていて、そのなかに骨や内臓が浮いている「原初生命体」としてとらえることからはじまります。

そして、一般的な体操では考えづらいことですが、野口は、ことばや音、文字について味わうこと、実感することもまた体操であると考えました。とりわけ、ことばについて野口が問題としたのは、自分にとってことばとは何か、という問題でした。野口にとって、からだとことばはわけられないもの、不可分の存在であり、野口は「からだの感覚の不毛・貧困は、からだの中身の変化の感覚についての言語化への努力の怠慢からくる、ことばの貧困にある」と考えていたのです。

そして野口は、体操において何よりイメージを大事にしていました。野口にとってイメージとは、流動的で直感的な生き物であり、イメージを大事にすることは「今ことばにすることのできたものだけでなく、その背後の根源にひそんでいるもの、周辺に含まれているもの、これから後で生まれてくるもの･･････そのような『今はことばにならない非常に多くの何か』」を大事にすることであると考えました。

　このような考えのもと、からだの中身の変化を味わう一つの方法として、彼はことばや文字、音を用いて、さまざまな試みを行いました。「原初音韻論遊び」と名付けた遊びも、そのひとつです。これは文字や意味があらかじめ持っている先入観を断ち、まず音だけを味わいながら、その上でことばを味わい直す遊びです。

原初音韻論遊びでは、ことばを味わう際に、まずは五十音のひとつひとつの音について、その質感を思うままにあげていきます。そしてあとからまた、ことばを味わってゆくのです。

原初音韻論遊びによれば、たとえば「からだ」ということばが、なぜそのような音の組み合わせや順番でできているのか、ということも、次のように考えられます。たとえば、野口によれば、「か」「ら」「だ」のそれぞれの音の印象は次のようなものです。

「か」―開放的。明るい。歯切れがいい。すみきっている。均質。温度・粘度は低い。温度は適温（時に低く時に高いこともある。）明度・純度は高い。空間的位置はやや高い。時間的には短いが、忙しくはない。

「ら」―動きや変化を内包している。内部は多重構造で少しゆとりがある。明るく軽快、くり返したくなる。空間的位置は水平よりやや高い。温度・湿度は適当。時間的には「か」よりも少し長い。

「だ」―中心があり開放的である。快感をともなう重量感があり、存在感が明瞭、信頼感がある。形は球だが中身は柔らか味があり、多重構造である。界面はやや変化があり、柔らか味があり、隔絶されていない。温度はやや高く、湿度はやや高い。空間的位置はやや下のほう。純度はやや低く均質ではないが、不快感はない。上品とはいえないが、いい意味での野蛮さ（みずみずしく荒々しい力強さ）がある。

そしてこのことばが、なぜ「からだ」の順番なのか、また、なぜ全てア列のことばでできているのかなど、検討すべき問題は多く、そうした音韻遊びもまた、体操のひとつであるとしたのです。あくまで「遊び」ですから、正しい・正しくない、という問題にはなりません。このような遊びをするのには、わけがあります。野口は次のように考えていました。

（人間がことばを創造する際に、文字よりも音が先に創られたことを考えれば、「音を選ぶ段階」にこそ、ことばの生命にとって最も重要なことがひそんでいる。けれども、「音を選ぶ段階」について、文献学的に研究することは難しい。ならば、生きている自分の中で追体験しながら、ことばの創造を学ぼう。）

そこで誕生したのが、この遊びなのです。

②次のことばを「原初音韻論遊び」にあてはめて、分析してみよう。

「いのち」

「あたま」

「こころ」

「ふしぎ」

「まつり」

③自分のなまえを、「原初音韻論遊び」にあてはめて、分析してみよう。

引用・参考文献：野口三千三『原初生命体としての人間　野口体操の理論』岩波書店、2003年（1972年）